

精神分析のはなし 第6話 「あなたはひとつの例外です」

JAM：私は精神分析をあなたに説明しているのでしょうか？

いや、むしろ分析を思い起こしてもらい、分析している状態がどんなものでありうるのか、あなたに魅惑的に思ってもらおうと努めています。とはいえ、ものすごくそう努力しているというわけではありませんが。

今日、精神分析とは、いわばそれはひとつの賭け＝遊戯です。世界のもっともよい理由からそのことにひとは気づいていません。というのは、苦しませる症状があるという理由によって、ひとはその賭け＝遊戯をするからです。しかしそれはフロイトが人類に教えた賭け＝遊戯であり、ことば（ラング）との新しい賭け＝遊戯です。フロイトは人類に、「忖度することなしに話す」、ということをお教えました。良識や、ことば（ラング）の一般的な使用法、それから正しい方法に気をつかうことなく話すということをお教えました。

そしてひとは、ふつうのディスクールと距離をとるやいなや、すぐに治療的な効果があるということを確認します。落ち着きや鎮静が生じますし、かつ、この賭け＝遊戯をはじめるやいなや、ひとはそれを止めることを必ずしも望みまないものです。それは非常に魅惑的な賭け＝遊戯であり、ひとは続けることを望みます。さらに、続けるのにふさわしい理由のために、ひとがもう少しだけ苦しむ準備があるということさえ起こるのです。分析はそれ自体で維持されていて、精神分析への批判はそれをかならず強調しているものです。

ひとがまさに良くなりつつあるとき、逆説的に、ひとはより悪くはなるということが起こります。なぜならまさに、分析的な賭け＝遊戯のなかに、ひとつの原則が存在し、それが維持されるからです。このばね、それは、まずもってひとは話すということに享樂するということです。純粋な喪失状態でひとは話すことで享樂するということです。ひとは「恐竜」と言うことに、享樂します。それはおしゃべり（blablabla）の享樂です。

そのとき、おしゃべりの享樂に近づくために、良識を括弧に入れるということは、ある人々にとっては、とても難しいものです。極度に良識あるひとたち、極端に礼儀正しいひとたちは、ときおり良識を括弧に入れることに多くの困難をもつものです。しかし、まさにそこに、実践は向かっています。語にイニシアチブをまかせること、それらが愛をなすがままにすること、シニフィアン、言語の材料、音、それらがそれら同士で結びつくがままにすることです。

音と意味との結びつきがゆるまり、語、フレーズとその意味作用の結びつき、シニフィアンとシニフィエの結びつきがゆるまることが、だから分析では奨励されますし、かつそれは不可避的なひとつの効果でもあります。そのことにおいてこそ、分析的作用は存在します。つまりシニフィアンとシニフィエのあいだの確立された結びつきがゆるまるという点において、です。ことば（ラング）の大きなコミュニティーが存在し、コミュニティーのヒエラルキー全体というものがああります。それは友達のコミュニティーまであります。あなたを含むようなものまで、です。しかしひとはまさにことば（ラング）自体からでてくる噂を黙らせるために理解しあうことがあり、バルトはそれをことば（ラング）のざわめき、と呼んでいました。

ですから分析家は、そこにいます。シニフィアンとシニフィエの確立された結びつきをゆるめるのを助けるために、そこに存在します。つまり、馬鹿なふりをするためにいます、なにも理解しないために存在するのです。

それはつまり、シニフィアンからシニフィエへの移行にブレーキをかけるため、移行を遅らせるために分析家が存在することを意味します。疑問点、数学的な形式において道を示す X に、あなたが言うことを置くために、存在することを意味します。

分析で分析主体が言うことはつまり、私にとってわからないことばであり、そこから、分析の空間そのものが開かれうるのです。結果として、話す者にとり、自身が話したことというのは、自身にとりわからないことばとなり、それは謎になります。

謎とは、何でしょうか？それは何かを意味しますが、ひとはわからないのです。そのうえ、ひとは分析に行くのは、なにか謎に出会ったときです。もしあなたが一度も謎に、混乱に出会ったことがないならば、分析家に会いに行くいかなる理由もありません。ですから、精神分析家がそれとともにすることは、多くのプシ[精神科医や臨床心理士ら]たちがすることと大変異なっています。多くのプシは、ふつうのディスクールのなかにできるだけ早くあなたを再び押し込めることに専念するものです。彼らは世界を維持するための大いなる意味作用をあなたに説明し、規範を再発見できるようにあなたを援助しながら、そうするものです。

精神分析においては、あなたはひとつの例外です。

あなたは、あなたただひとり、例外です、こう言ってよければ、文化的な例外です。そして精神分析はあなたが自らの文化的例外を養い伸ばすことを助けます。分析によって、あなたには自明だと思える多くのことがらが、謎めいたものになります。

あなたにとり最も親しみあるものだったものを、あなたは疑問にふしはじめるのです。そしてそれはあなたにとり奇妙なものになるのです。あなたは望んでいたにせよいなかったにせよ、それと距離を置きます。

分析で話すというただそれだけのことが、一族の語を問いにふすのです。あなたの分析は価値と呼ばれるものすべてとともにそれらの語を震わせ、ぐらつかせます。私たちにともに生きることを可能にする価値、理想、場合によっては、神、祖国、ヨーロッパ、善、真理、美のような価値、理想とともに、です。そしてだれかが言っていたように、本当のことの輝きさえも、ぐらつかせるのです。

分析家が異論をとることは、私は分かりません。分析家は反対しません、論争をしません。しかしただ分析で話すということが、一族の偉大な語を括弧に入れるのです。ソクラテスの例は、社会の理想との関連で、分析家のポジションの輪郭を明確にすることを助けてくれるでしょう。ソクラテスはアテネの街を散歩する人物でした。ひとは家にいる彼の姿は示していません。さらに、彼は妻から逃げていた、むしろ若い男性にたいする好みを持っていたと言われていました。彼は彷徨っていて、招かれていて、ある者の家、また別の者の家に招かれていました。そしてアテネでは彼のことを **atopos**、つまり場所をもたない人と言われていました。**Topos** は場所で、**A** は欠性辞です。ソクラテスは場所をもたず、位置づけできない者です。

よろしい。精神分析家はそのような人物です。ひとが分析家に、はい、または、いいえ、と要求するとき、分析家ははい、いいえと言ひ、両方言ひ、それからはい、そしていいえと言ひうのです。そして精神分析もまた場所をもたないものです。というか、精神分析はそうあろうと望んでいます。

ところで、分析家とは、皮肉屋であると言われます。たとえばソクラテスですが、勇気について、彼は寛大な人たちを困らせていました。彼らはそれが何であるかを知らないのだと示すことにより困らせました。美について芸術家たちにも同じことをしました。そして彼らは互いに耐えがたいと同時に不可欠な存在にもしていました。それらを話しつつ、彼らもつ

とも執着しているものを宙づりにすることによって、していました。そしてこのように、ソクラテスは都市国家の支配的な語に揺さぶりをかけていました。

そのとき彼の弟子プラトンが納得したのが、討論の袋小路をとおして、アイデア界にはひとつの秩序があり、それを再発見すること、それを観賞することが肝心であるということでした。しかしソクラテスにとっては、それはあまり確かなことではありませんでした。

そして精神分析家にとっては、その普遍的な秩序は存在しません。たんにあなたがひとつの秩序を再構成することができるかどうかを知ることが問題です。あなたの好みに合わせた、ほんの少しだけより良く生きることを可能にする、ひとつの秩序を再構成できるかどうかです。

精神分析家は、疑問点を出すそのやり方をもって、馬鹿なふりをするやり方をもって、皮肉屋のポジションをとるのです。私が大好きなフロイトの解釈があります。それは閃光の秩序からくるものですが、フロイトがアメリカ人の弟子のひとり、パットナムにした解釈です。パットナムはたしかプロテスタントの牧師であり、高い道徳心をもち、強烈な超自我をもっていました。超自我とは、ひとが超自我に与えれば与えるほど、超自我はもっと欲しがるといふ、つまり超自我は貪欲なものです。

そのときパットナムは猜疑心に満ちていて、フロイトを見つけにやってきて、パットナムが過去に犯したかも知れない、彼をさいなんでいたあらゆる微罪を暴露しました。それらの微罪は彼の強迫となっていたものでした。そしてフロイトは彼の前に来て、彼を苦しめているそれを聞いて、言ったのです。「じつはあなたは犯罪者なのです」、と。

それはいわば結論、留め縫いの点 (point de capiton)、パットナムがべちやくちや喋ったものすべての停止の点でした。フロイトは、彼の訴えから論理的な結論を引き出したのです。そしておそらくそれが、パットナムが自らのポジションを振り返ることへと導いたのです。

フロイトは「すべて大したことではありませんよ」、「あなたはすばらしい人です」、「あなたは気を揉む必要はありません」、とは言いませんでした。ある種のやり方で、それらとは反対に、フロイトは「じつはあなたは犯罪者なのです」と言いながら、エスカレートさせました。それは「本当にあなたはそこであなたが言っていることを言いたいのですか?」と言っ

たのに等しいのです。そして「あなたは犯罪者です」というのも、そのあと何も彼に変化をもたらしませんでした。

そのうえ、分析の文脈では、フロイトの解釈は主張ではなくて、それは宙づりになったままです。パットナムこそが、つぎに自身が言ったこととの関連で、その解釈を位置づけるのです。はい、もしくは、いいえ、と言うことは、彼が自身の癖、小さな罪から自身を犯罪者にすることを評価することになります。シニフィアンとシニフィエのあいだに遊びがないとき、音と意味のあいだに遊びの空間がないとき、それはとても抑鬱的なものです。

ひとは抑鬱的な主体がやって来るのを見るのですが、その主体は罪悪感の巨大な意味作用に彼らが押しつぶされています。じっさい、分析によって、ひとはそれを遊びの空間、シニフィアンの遊びに置き換えることができます。ひとつの解釈は、あるとき、たんに「それはそうです」、と、言うことであり得るでしょう。そしてシニフィアンとの関連で、シニフィエの一般的な浮遊のなかに、一般化された誤解のなかに、ひとつの「それはそうです」が、シニフィアンとシニフィエの全体を掴み、縫う効果を持ちます。そしてそれは解釈の機能をもっています。

ですから「それはそうです」は、ひとつの説明ではなく、コメントというものでもなく、ひとつの構築でもなく、ひとつの知でもありません。分析において、ひとが言うように、分析家はパロールを情報を伝達するために用いるのではありません。バクテリアはバクテリア同士、情報を交換しています。それが私たちに説明されているところです。バクテリアはやり取りし合っている、情報をコミュニケーションし合っている、と。

たとえば、ルミネセンスのバクテリアが存在します。そしていつどんなときに知るため・・・
というか、バクテリアがいかの目を光らせるのか知るために、情報を互いに交換しあい、充分多数いるときにしか、光を放ちはじめません。それをひとはコミュニケーションと呼んでいます。

そして知のコミュニケーションと、ひとはそれを呼ぶことさえ出来ます。それは失敗しないバクテリアの知です。問題は、まさに、バクテリア同士は誤解が決しておきない、ということです。そのことこそが、ことば（ラング）との違い、シニフィアンとシニフィエの遊びとの違い、バクテリアと話す存在の違いを作るものです。話す存在（話存在）とは、ことば（ラング）とうまく付き合うべき者のことです。そのうえ、バクテリアに誤解が起きるかもしれ

ないことを、絶対に排除できません。ひとが被らせるあらゆる操作を持ってすれば、誤解は起きるかもしれません。それは私には分かりません。

しかし、バクテリア間で誤解が生じる日には、それは非常によくないことになるでしょう。バクテリアにおける障害であり、ですからおそらく私たちのなかでもおなじことになるでしょう。

難しいのは、分析家が効果を得ようとして分析のなかで話すとき、すべてが誤解の要素となってしまうことです。分析的解釈がもつ効果も計算できないほどに、そうになってしまうのです。あなたは患者にひとつことばをかけます。あなたは患者のなかでそれがひっかかるような意味について考えをもっていないなら、それはあてずっぽうに言ったことになります。たとえばある者が具合が悪いので、あなたはその患者を励まそうとして手を取り、「あなたはそれが出来ますよ」などと言います。よろしい。患者はたぶん次の回もやって来るでしょうが、あなたが患者をののしったのだと言うのです。あたかも、あなたが患者の手をとりながら、あなたの適切な助言がなければ患者自身ではそれが出来ないかのように、そう言ったのだと言うのです。本当にそういうものなのですよ。